

## 注文の多い料理店

宮 沢 賢 治

---

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄砲を担いで、白熊のような犬を二疋連れて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、歩いておりました。

「ぜんたい、ここらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「鹿の黄色な横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくる回って、それからどたっと倒れるだろうねえ。」

それは大分山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちょっと返してみ言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、頭をまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔色を悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもう戻ろうと思う。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹は空いてきたし戻ろうと思う。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい。」

「兎も出ていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」  
ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまり歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。ああ困ったなあ、何か食べたいなあ。」

「喰べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふと後ろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

『RESTAURANT・西洋料理店』

『WILDCAT HOUSE・山猫軒』

という札が出ていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「入ろうじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なものです。

そして硝子の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、今度はこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、中へ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大喜びです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水色のペンキ塗りの扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉を開けようとしますと、上に黄色な字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りには少ないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これは全体どういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきっと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいということだ。」

「そうだろう。早くどこか室の中に入りたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところが、どうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さま方、ここで髪をきちんとして、それから履物の泥を落してください。」と書いてありました。

「これはどうも尤もだ。僕もさっき玄関で、山の中だと思って見くびったんだよ」

「作法の厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互に寄り添って、扉をがたと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでも食べて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持って物を食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。確かによっぽど偉い人なんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の

中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖った物は、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金物の物は危ない。ことに尖ったものはあぶないと云うんだろう。」

「そうだろう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだろうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人は眼鏡をはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちんと錠をかけました。

すこし行きますとまた扉があって、その前に硝子の壺が一つありました。扉にはこう書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっきり塗ってください。」

見ると確かに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームを塗れというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室の中があんまり暖いとひびが切れるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほど偉い人が来ている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族と近づきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたが、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

と書いてあって、ちいさなクリームのお壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。危なく耳にひびを切らすとこだった。この主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうもこうどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔のような匂いがするのです。

「この香水は変に酔臭い。どうしたんだろう。」

「間違えたんだ。下女が風邪でも引いて間違えて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字でこう書いてありました。

「色々注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んで下さい。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、今度という今度は二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいと思う。」

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういふことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」がたがたがたがた、震え出してもう物が言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたがた震え出して、もう物が  
言えませんでした。

「逃げ……。」がたがたしながら一人の紳士は後ろの戸を押そうとしましたが、  
どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀色のホークと  
ナイフの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。さあさあ中にお入り  
ください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこ  
っちを覗いています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

二人は泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、色々注文が多くて  
うるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ。」

「それはそうだ。けれども、もしここへあいつらが入って来なかったら、それ  
はぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしゃい。いらっしゃい。  
いらっしゃい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置しま  
した。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまく取り合わせて、まっ白なお皿に載  
せるだけです。早くいらっしゃい。」

「へい、いらっしゃい、いらっしゃい。それともサラダはお嫌いですか。そん  
ならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかく早くいらっし

やい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙層のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶる震え、声もなく泣きました。

中ではふっふつと笑ってまた叫んでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。時機持ってまいります。さあ、早くいらっしやい。」

「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフを持って、舌なめずりして、お客さま方を待っています。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

その時、後ろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声がして、あの白熊のような犬が二疋、扉をつきやぶって室の中に飛び込んで来ました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはううと唸って、しばらく室の中をくるくる廻っていましたが、また一声「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりと開き、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うの真っ暗闇の中で、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」という声がして、それからがさがさ鳴りました。

室は煙のように消え、二人は寒さにぶるぶる震えて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとに散らばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなって戻ってきました。

そして後ろからは、



「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。

蓑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師の持ってきた団子を食べ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元のおりに直りませんでした。